

# 母が舞う

## 第5回「文芸思潮」 現代詩賞 優秀賞

夜中に目を覚ますと  
母が幽霊になって座っていた  
母は集合したガス体だが  
霧の奥深に  
太古の沼をひそませていた

次第に可視化された母の実体は  
真赤な長襦袢をけだるく羽織り  
裾を血のように引きずると  
乳房と腹と性器をどろりと曝け出し  
全身を中空に捧げ苛み  
左足を軸にくるくる舞い始めた

妊娠した母の腹は皮が透け  
危うい痙攣で  
破裂するまで膨張する  
紫に浮き立つ血管が不規則に脈打ち  
宇宙創生の羊水が渦を巻く

小さな裸の人形を  
大切に母は胸に抱き  
しかしそれは人形ではなく  
干からびた赤ん坊の木乃伊だ

死んで産まれた「私」というものの木乃伊  
あるいは木乃伊である私そのもの

微笑する母  
目には光なく白く濁り  
全ての世界を拒絶し受胎する

私の木乃伊を右手にわしづかみ  
飛翔の体勢に両腕を広げてそばだち  
華奢な顎を突き出して小刻みに頭ふるわせながら  
左足を軸に永遠の回転を続ける

母は何度も私を孕み  
私に連なる私を産み落とそうと  
くるくるくるくる  
くるくるくるくる

羊水に眠る私ごと  
死んだ私をかき抱き

夜ごと夜ごと  
ただひたすらに

引き攀れた産みの果てなき瞬きを舞い続ける

# 江口久路



えぐち ひさみち

10代の終わり頃から「中央文学」に詩を発表。  
その後、小説に移行。途中、約15年のブランクを経て、  
2004年から活動再開。  
小説「鬼の手」で第四回銀華文学賞奨励賞受賞。  
劇場勤務。52歳。

## 受賞の言葉

### 江口久路

じくじくと膿んだ皮膚に指の腹をそっと押し当て鼓動を確かめる。次第に指先に力を込め、時に小さく爪を立てる。破壊された細胞を爪で掻き出し、取り返しのつかない自身の行く末を予感する。

私にとって、詩作とは、私というものの精神の過程をたどり、そこを何度も巡りながら、中にひそむ言語的欠片を拾い集めて行く一連の作業です。しかし、時として思いがけず私自身を危険な状況におとし入れる恐れもあるため、久しくおこなってはきませんでした。「五条秀敏」という名で詩を発表し始めたのは、まだ二十歳に満たない頃だったと思います。それから数年は詩を書いていたはずですが、あまりに古い話で、いただいた掲載誌もいつの間にか手元から消え去ってしまいました。

やはり当時も、不健康な、死をイメージさせる内容の詩ばかりを書いていたという記憶があります。長い年月を隔てても、自分の立ち位置が変わることはなかったようです。

この度、このような素晴らしい賞をお与えいただいた機会に、また少し、詩のほうも書いてみようかという気持ちになっています。

小説とのバランスを保ちながら、結晶化する言葉をとらえ、それらをうまくつなぎとめることができたら、これからの詩作を続けて行きたいと思っています。

この度は本当にありがとうございます。